

近代日本新聞デザイン史序説

——「段越え見出し」の初期用例に着目して——

小田 泰成

はじめに——新聞のデザインを研究する意義

従来の歴史研究の多くは新聞を史料として扱い、主に記事の内容に着目してきたように思われる。しかし記事がどの位置に、どのような装飾を施した状態で掲載されるかといった形式も、新聞の内容と密接に関連している。本稿の大きな目的は、近代日本の新聞の形式を「デザイン」という観点から捉え直すことにある。

近代日本の新聞デザインを研究することは、二つの意味で近代とは何かという問いに貢献する。第一に、そもそも新聞とはそれ自体が、近代に誕生した文化的産物の一つである。中でも新聞のデザインに着目することは、記者（送り手）がどのような意図で紙面を編集したか、読者（受け手）がどのように情報を理解したか、といった点の解明につながる。新聞を介したコミュニケーションの理解を深めることで、近代日本の全体像に新たな知見を加えることが可能になるだろう。第

二に、冒頭で述べたように、新聞は歴史研究を進める上で重要な史料の一つでもある。デザインという観点から新聞の史料的性格を検討することで、新聞の内容を分析するだけでは浮かび上がらない知見を、個々の近代史研究に加えられるだろう。

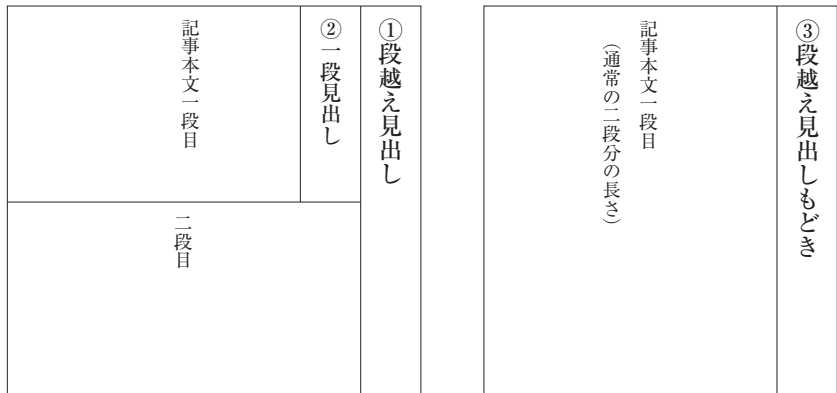
「デザイン」という語の定義は多様だが、本稿では見た目の美しさといった意味ではなく、情報を伝える上での工夫といった意味で捉えたい。狭義の「デザイン」は、紙面に記事本文や見出しなどの諸要素を配置・装飾することを指し、ほぼレイアウトと同義である。一方広義には、情報をどのように伝えるか、言い換えれば新聞社の活動一般も「デザイン」という概念で捉えることができる。例えば重大なニュースが飛び込んだ場合、通常の紙面（本紙）で派手なレイアウトを採用して報じること（狭義）も、読者に速報を届けるために号外を出すこと（広義）も、記事の重要性を提示するためのデザインとして捉えられる。以下では広い意味での「デザイン」を頭の片隅に置きつつ、基本的には狭い意味で「デザイン」という語を用いる。

新聞のデザインを研究する上では、本来であれば新聞の紙面を構成するさまざまな要素を考慮しなければならない。しかし本稿では以下の理由から見出し、中でも複数の段（新聞紙面を縦に等分に区切った部分）にまたがる「段越え見出し」に対象を絞る（図1）。まず、新聞の見出しは現代では「読者が最初に目にするもので、ニュースの看板であり、ニュースのダイジェスト」¹⁾などと説明されるように、記事を表す存在として重要である。加えて、現代の新聞では記事の重要度の高さと、その記事の見出しの段数の多さが比例しており、見出しはニュースの重要度を定量的に示す指標としても機能している。²⁾しかしこのような段越え見出しは、明治初年の新聞には存在しなかった。つまり段越え見出しの登場は、ただ単に記事を羅列する状態から、優先順位に沿って記事を配置する状態に移行する画期の一つと、ひとまずは仮定できるだろう。

本稿は「はじめに」と「おわりに」を除いて、全四章から成る。第一章は先行研究の整理と、段越え見出し登場以前の見出しの略史に充てる。新聞そのものを近代の文化的産物と捉えて分析するのが、第二章と第三章である。具体的には、第二章で段越え見出しの初出例を明らかにし、第三章で段越え見出しが導入された背景を考察する。第四章では、新聞を史料としてみなした上で、一九一八インフルエンザ（いわゆるスペイン風邪）³⁾に関する歴史研究を例に、新聞デザイン研究の応用可能性を提示する。

本稿で分析対象とした新聞は、いわゆる二大紙として新聞界の中心を占めた『大阪朝日新聞（大朝）』と『大阪毎日新聞（大毎）』、およびそれらの東京版である『東京朝日新聞（東朝）』と『東京日日新聞（東日）』⁴⁾である。新型コロナウイルス感染症の流行下において、デー

【図1】 段越え見出しの図解



①は段越え見出しで、②の1段見出しと異なり、1段目と2段目にまたがっている。③は、縦の長さが通常の2段分になっており、一見段越え見出しのように見える。しかし記事本文も1段が通常の2段分の長さになっているため、厳密には段を越えていない。詳細は第2章第1節でも述べるが、本稿ではこうした見出しを「段越え見出しもどき」と呼ぶ。

データベースを通じて比較的容易にアクセス可能だったという理由も大きい。⁵⁾特に『東朝』は、いち早く政論ではなく報道を重視した新聞として重要であり、第一章第一節で扱う先行研究でも多く引用されていることから、本稿でも代表的な新聞として扱う。第四章ではデータベースの検索機能が充実しているという理由で、主に『東朝』と『読売新

聞(読売)』を分析対象とした。⁽⁷⁾なお、本稿で取り上げる紙面は特記なき限り、号外や付録ではなく本紙の朝刊である。⁽⁸⁾

第一章 先行研究の整理と段越え見出しの前史

第一節 主な先行研究

近代日本の新聞における見出しの変遷を主題とする先行研究は数少ない。最初期の研究として、鈴木英夫「新聞の見出しの近代化——東京朝日新聞を中心として」⁽⁹⁾が挙げられる。同論文は明治期の『東朝』の見出しの変遷をたどった点と、段越え見出し登場以前の見出しの分類(詳細は次節)を試みた点に新規性がある。

鈴木は『東朝』での段越え見出しの初出例を、明治四十五年七月二十一日四面「聖上陛下御重態」⁽¹⁰⁾と推定した。この九日後に崩御することになる明治天皇の病状の重さを伝える記事である。鈴木は「こうした試み〔段越え見出しのような、見出しの新しいパターンの登場〕は、戦争・災害といった大きな出来事をきっかけとして使われ出し、それが普通の記事にも及ぶようになる」⁽¹¹⁾と主張している。

近年の研究としては、奥武則「見出しの誕生——新聞の視覚媒体的要素についての一断章」⁽¹²⁾が挙げられる。奥は段越え見出しの初出例を、『東朝』では明治四十五年七月二十二日四面「御病状依然」と、『万朝報』では同年七月三十日三面「天日昏く神人哭す」と推定した。『東朝』での初出例が鈴木指摘より一日遅いことから分かるように、奥の論文には鈴木論文に言及していないという問題がある。とはいえ、複数紙の比較という点では新規性がある。奥の結論は「天皇崩

御」は近代日本に誕生した新聞というメディアが最初に経験する特大のニュースだった。このニュースを契機にして見出しが、長く越えることができなかつた「段」というハードルを越えたのは当然だったかもしれない⁽¹³⁾というもので、鈴木と似通っている。なお本稿で用いている「段越え見出し」という表現は、管見の限り奥の発案と思われる。他、概説的ではあるが、板村英典「近代新聞の発達と見出しの変容」⁽¹⁴⁾は、現代の見出しまで視野に入れて豊富な先行研究を挙げており、参考になる。崔慈芳、宮崎紀郎、玉垣庸一「台湾の新聞デザイン変遷(1) 日本統治時代から『報禁』実施まで(1895~1955)」⁽¹⁵⁾は、近代の台湾・日本・中国の新聞デザインを比較した、ごく大まかな通史となっている。

近代日本の新聞の通史を描いた文献のうち、見出しについて比較的に詳しく触れたものとして、西田長寿「明治時代の新聞と雑誌」⁽¹⁶⁾が挙げられる。これは段越え見出し登場以前の見出しに関する概説も兼ねているので、少し長くなるが引用してみたい。

よみ易い新聞とするために、記事見出しもいろいろ工夫された。明治初年においては記事に見出しがなかった。社説に題をかかげ出したのは、西南戦争前後である。『東京日日新聞』について記事見出し発展の跡を辿ると、明治一四年一月四日からは、雑報記事本文の上に、本文と同号(五号)活字の見出しを附しはじめた(これは後に「かぶせ見出し」⁽¹⁷⁾と呼ばれる)。明治二三年三月(一八日)頃から重要記事の見出しに別行四号活字など用い初めている。一般記事の別行見出しは明治二四年三月三日から用いはじめられたようである。以後必要に応じて別行大活字見出しを増加して行っているが、段抜き見出し(段越え見出しと同義か)は明治

四四年三月頃までは見られない。がとにかく編集者がその記事を重視する程度に従って見出し活字は、二・三・四号活字と各種の活字を使用し、読者の眼を惹くことに留意した⁽¹⁹⁾

このように西田は『東日』を対象に、段越え見出しの初出例が明治四十四年三月だとしている。対象紙が異なるとはいえ、奥や鈴木の手摘より初出時期が一年以上早いことになる。他方で「編集者がその記事重視する程度に従って」見出しの文字の大きさを変えるという西田の主張は、鈴木や奥の主張と共通している。

他、新聞を史料として用いる中で断片的に見出しのデザインについて触れた研究や、現代の新聞の見出しを扱った研究、海外の新聞の見出しを扱った研究も多数存在する。しかしそうした研究を全て把握できていないこと、本稿の関心との直接の関連性は薄いと考えられることから、詳細は割愛する。

第二節 段越え見出し登場以前の新聞デザイン——強調表現を中心に

見出しは「看板」と表現されるように、少なくとも現代では、その記事の存在を目立たせる役割を果たす。本節では、新聞史の流れをこく大まかに確認した後、段越え見出しの登場以前に存在した、記事を目立たせる手段について確認しておきたい。

日本の新聞史を紐解くと、まず明治初期に「絵本、錦絵、読売瓦版」という近世の視覚メディアを再統合した印刷物⁽²⁰⁾として、挿絵付きのメディアである錦絵新聞が誕生した。錦絵新聞は「新聞紙の雑報に浮世絵師が挿絵を描く先駆けとなり、さらに後の漫画やテレビなどの視覚メディア、あるいは大衆ジャーナリズムにつながる表現形式であつ

た⁽²¹⁾。しかし、やがて同じく大衆を対象とし、情報量や速報性で勝る「小新聞」に押されて姿を消す⁽²²⁾。他方、明治初期には、主に知識人を対象とした、政論重視の「大新聞」も現れる。明治二十年ごろからは大新聞と小新聞の境目が曖昧になり、現代の新聞に近付き始める⁽²³⁾。本稿で扱う新聞のルーツをたどると、東西「朝日」と『読売』は小新聞、東西『毎日』は大新聞に相当する⁽²⁴⁾。

続いて、段越え見出し登場以前の見出しの発展について述べる。前節で引用した西田の説明のように、明治初期の新聞には見出しは存在しなかった⁽²⁵⁾。西田の指摘通り『東日』では、明治十四年一月四日から記事本文の一行目に付される見出し（かぶせ見出し）が多くの記事で一斉に見られるようになる。ただしそれ以前から、散発的にかぶせ見出しや、本文と別行の見出しも存在していた。『東朝』では明治二十一年七月十日の創刊当初から、ほぼ全ての記事でかぶせ見出しが用いられている。

鈴木はかぶせ見出しの発展の方向性を、次のように分類した⁽²⁶⁾。

A型 見出しを「本文と」別行とする

B型 見出しの活字を大きくする

C型 見出しに傍点を附す

鈴木によれば『東朝』では明治二十四年ごろからB型とC型が現れ、日清戦争期ごろから現代の見出しに近いA B型（本文とは別行で、本文よりサイズが大きい見出し）が頻繁に用いられる⁽²⁷⁾。ただし実際には創刊号（明治二十一年七月十日）の二面に、既に連載小説の「●涙」という見出しがA B型（本文が五号活字であるのに対して、見出しは恐らく三号活字⁽²⁸⁾）として登場している。C型の見出しも、創刊直後の明治二十一年七月二十一日一面「●特派員登山」（磐梯山噴火に関する

る特設欄の記事)などに見られる。

記事本文も、一部の文言だけ活字を大きくするという強調手法が採られることがあった。このパターンが『東朝』で初めて現れたのは、創刊直後の明治二十一年七月二十二日一面の社告である(見出しは付けられていない)。磐梯山噴火の絵を付録として届けることを予告する内容で、本文の「磐梯山噴火」「精細なる真図」「大真図」という箇所が恐らく二号活字(五号活字の二倍の大きさ)となっている。さらに日清戦争期には、例えば明治二十七年七月二十三日『東朝』号外「●清韓條約破棄の嚴談」のように、記事本文の一部どころか全てが見出しと同じ大きさ(恐らく二号活字)が用いられるパターンも登場する。

記事本文の一部に傍点を振るパターンも存在した。『東朝』での初出例は明治二十一年七月二十日四面の、見出しのない訂正記事である。訂正前の「ヒタチ」と訂正後の「タヒチ」に、それぞれ白丸の傍点が振られている。

特殊なパターンとして、訃報記事の見出し、もしくは記事全体を太い黒線で囲むことで、記事を目立たせるとともに弔意を表するということもあった。『東朝』での初出例は、明治二十一年十月二十四日一面「●三島警視総監逝去」である。この記事は五段目(全六段)の端から端までを占めており、太い黒線も五段目を丸々囲んでいる。

以上、本章では日清戦争期までに、段越え見出し以外の強調のパターンが複数存在していたことを確認した。次章では、段越え見出しが初めて登場した時期を特定する。

第二章 段越え見出しの誕生

第一節 号外における段越え見出しの登場と意義

本章では段越え見出しの初出時期を特定する。まずは段越え見出しの定義について詳細な検討を加えたい。奥は「記事そのものが通常の1段を越えたかたちで生まれ、それに伴ってふつうの見出しより長い(つまり、長さだけは「段」を越えている)見出しがついているケースはある時期からかなり見られる」と指摘している⁽²⁹⁾。本稿ではこうした見出しを便宜上「段越え見出しもどき」と呼び、段越え見出しとは見なさないことにした(図1)。段越え見出しは段の縦幅が均一だからこそ、段数によって記事の重要性を定量的に示せるのであって、段の縦幅そのものが変わると定量的な指標としての側面を失うからである。同様に、写真や図表が縦二段以上になるのに伴って、長さが通常の一段分以上になっている見出しも、段越え見出しとは見なさない。またどれだけ派手であろうと、横書きの見出しも対象外とした。

判断に迷うのが、題字ともみなせる段越え見出しである。例えば『大毎』の場合、明治三十八年十月八日から、毎週日曜日に「日曜文壇」というタイトルが付いた付録を発行するようになった。この「日曜文壇」という文字は一見、二段見出しのように見える。しかし見出しの文言は本来、個々の記事・連載に独自に付されるものであり、その記事・連載が終われば原則として同じ文言の見出しは二度と登場しないはずである。「日曜文壇」は、毎週同じ文言が繰り返されていること、連載というには規模が大きすぎることから、題字と扱う。同様

【表1】号外における段越え見出しの初出例と2番目、3番目の例

新聞名	掲載日	見出し	備考	掲載面/ 全体の面 数	見出しの上 端が位置す る段/全 体の段数
『東朝』	明治27年9月20日	●海軍大勝利	日清戦争での戦果を伝える速報	1/1面	1/2段
	明治37年9月2日	遼陽占領	日露戦争での戦果を伝える速報	1/1面	1/3段
	明治37年10月16日	我軍全勝		1/1面	1/3段
	明治37年10月16日	我軍全勝〔第三号外、上の記事とは別のもの〕		1/1面	1/4段
『大朝』	明治38年3月12日	敵兵降伏 軍需品大収獲 捕虜続	日露戦争での戦果を伝える速報	1/1面	1/2段
	明治38年9月6日	●政府対国民の戦	日比谷焼き討ち事件の速報	1/2面	1/5段
	明治38年9月7日	●戒厳令施行		1/1面	1/2段
	明治38年9月7日	●京都は第三の露都 ▲演説会の中 止解散 ▲圓山派出所の打毀し		1/1面	1/2段
『東日』	明治37年2月14日	仁川旅順海戦詳報 帝国海軍大勝利	日露戦争での戦果を伝える速報	1/2面	1/6段
	明治38年5月29日	大日本帝国万歳 大日本海軍万歳		1/1面	1/3段
	大正元年9月14日	●御霊柩列車	明治天皇の葬儀に関する報道	1/4面	1/8段
『大毎』	明治37年8月30日	●遼東攻撃戦詳報	日露戦争での戦果を伝える速報	1/1面	1/4段
	明治37年9月13日	●黒木軍の遼陽戦闘経過		1/1面	1/4段
	明治37年9月15日	●遼陽攻撃戦詳報〔上の号外とは別のもの〕		1/2面	1/5段

に、欄名も段越え見出しとは見なさない。

広告・社告についても、本稿では考察の対象外とした。目立たせようという意識が記事以上に強く表れる、記事よりも時間に余裕を持ってデザインできる、といった条件の違いが考えられるためである。

以上のような定義を踏まえた上で、著者は各紙のデータベースに収録されている紙面の画像を、創刊号から段越え見出しが初登場する号まで全て閲覧した。ただし号外はデータベースに収録されていないものも多いと判断し、羽島知之『号外』明治史 1868-1912『全三巻』(30)も参照した。結果は表1(号外)と表2(本紙、詳細は次節)の通りである。各紙において、初めての段越え見出しが特殊な例だった可能性も考慮して、二番目と三番目の例も取り上げた。ただし今後新たな号外や、データベースに収録されているものとは異なる版の本紙を発見した結果、初出例がさらに前になる可能性もある。

まず号外では、早ければ日清戦争期に段越え見出しが登場している。そもそも号外は、本紙と別刷の新聞であり、新聞社が重要と判断した情報をいち早く読者に届けるために発行される⁽³¹⁾。つまり号外に掲載されるのは基本的に、強調されるにふさわしい記事である。事実、表1には、日清戦争や日露戦争、日比谷焼き打ち事件といった重大な出来事を扱った記事ばかり登場している。こうした理由から、号外では本紙より早く段越え見出しが登場したのだろう。ただし、四紙とも同じ日に段越え見出しを採用しているわ

【表2】本紙における段越え見出しの初出例と2番目、3番目の例

新聞名	掲載日	見出し	備考	掲載面/ 全体の面 数	見出しの上 端が位置す る段/全 体の段数
『東朝』	明治40年10月27日	虞美人草（十九の一）（第二百二十五回） 漱石	夏目漱石「虞美人草」の連載。10月28日が「十九の三」となっているのは「十九の二」の誤りか	5/8面	1/7段
	明治40年10月28日	虞美人草（十九の三）（第二百二十六回） 漱石		5/8面	1/7段
	明治40年10月29日	虞美人草（十九の三）（第二百二十七回） 漱石		5/8面	1/7段
『大朝』	明治39年1月10日	魔美人	懸賞小説の連載	9/10面	1/7段
	明治39年1月13日	魔美人		9/10面	1/7段
	明治40年9月30日	●世界の大宝庫（一）		ノンフィクションの連載	9/10面
『東日』	明治40年3月21日	昨日の東京勸業博覧会	東京勸業博覧会の特集記事	7/8面	1/7段
	明治40年8月26日	稀有の大洪水詳報	荒川の洪水の特集記事	7/8面	1/7段
	明治40年8月27日	●五十年目の大洪水 東京市の水攻		7/8面	1/7段
『大毎』	明治37年10月10日	●旅順攻撃戦詳報	日露戦争の旅順戦のレポート	5/12面	1/6段
	明治37年10月17日	●旅順攻撃戦詳報（其二）		5/12面	1/6段
	明治37年11月3日	●旅順攻撃戦詳報（其三）		7/16面	1/6段

明治38年1月3日『東日』1面には、右下に「大日本帝国万歳」という4段見出しのような文字が見える。しかし同じ面の左下にも「大日本陸海軍万歳」という4段見出しのような文字が見える。従ってこれらは見出しではなく左右対称の装飾と判断した。

けではない。加えて、例えば日露戦争の期間中だからといって毎回のよう段越え見出しが採用されているわけでもなく、段越え見出しの定着には時間を要していることがうかがえる。さらに本紙との関連で興味深いのは、同じ記事でも号外と本紙で扱いが異なる場合があることだろう（そもそも本紙に再録されない号外記事も存在する）。例えば明治三十七年九月二日『東朝』号外「遼陽占領」は二段見出しだが、翌三日の本紙一面では一段見出しとなっている。この理由については次章第二節で考察したい。

第二節 本紙における段越え見出しの登場と意義

本紙では『大毎』で明治三十七年、その他三紙で明治四十年に、それぞれ段越え見出しが初登場している。初出例や二番目、三番目の例は、戦地レポートや小説といった連載記事が多い。

特筆すべきは東西『朝日』で、小説の連載の途中でいきなり段越え見出しが導入されていることだろう。例えば『大朝』の場合、段越え見出しの初出例となったのは明治三十九年一月十日九面「魔美人」である（図2）。正確には、見出しの文字列自体は縦一段程度の長さなのだが、その周りを縦二段のイラストが取り囲んでいるため、結果的に段越え見出しとなった。現代風に言えば、これは「魔美人」という連載小説に特有の「ロゴ」に当たるだろう。しかし「魔美人」の連載自体は、二日前の八日に始まっており、その時の見出しは一段だった。さらに、段越え見出しが登場した翌日の十一

【図2】明治39年1月10日『大朝』9面「魔美人」



日には、再び「魔美人」の見出しが一段になっている。なお十三日にも「魔美人」が段越え見出しになっているが、十日とは異なり、通常の二段見出しの右に縦二段の挿絵が置かれている。つまり連載の途中で「ロゴ」が頻繁に変更されていたのである。

なお『大朝』本紙における「魔美人」の次の段越え見出しとなったのが、明治四十年九月三十日九面「●世界

の大宝庫」だった。この連載は、同年十一月二十日の最終回まで、終始同じ形の二段見出し（両脇に罫線が引かれてはいるものの、ロゴといえるほどの挿絵はない）を保った。内容は、カナダのハイダグワイという諸島で銅山を発見した、池田有親の足跡をたどるというもの⁽³²⁾である。

『大毎』の場合、初出例は明治三十七年十月十日「旅順攻撃戦詳報」という、日露戦争の戦地レポートだった。一見、日露戦争というテーマの重大性に鑑みて見出しが段を越えたと見えそうである。もし

本当にそうだとすれば、『大毎』本紙の他の日露戦争関連記事でも、頻繁に段越え見出しが用いられているのが自然だろう。しかし実際には明治三十七、三十八年の『大毎』本紙で、「旅順攻撃戦詳報」の連載以外に段越え見出しが用いられる記事は、日露戦争関連では二つしか存在しない⁽³³⁾。明治三十八年五月三十日二面「●大海戦公報 敵艦全滅」と、翌三十一日二面「●大海戦公報（其二）」である。

最後に、『東日』での初出例はイベントレポートだった。『大毎』での初出例だった「旅順攻撃戦詳報」も、テーマは日露戦争とはいえず、速報というよりはノンフィクションの連載である。つまり四紙の初出例は、いずれも政治や軍事、経済といった硬い話題とは関係が薄いといえる。これらは次章第一節で説明する言葉を先んじて使えば「軟派」記事に当たる。

以上、本章では東西『朝日』と東西『毎日』を対象に、段越え見出しの初出例の特定を試みた。創刊号から可能な限り全ての本紙を閲覧し、西田や鈴木、奥といった先行研究が指摘していたより前の時期に、段越え見出しが登場していたことを確認した。実際の初出例を詳しく見ていくと、号外はまだしも、本紙では本当に段越え見出しがニュースの重要性を表すために用いられていたのか、疑わしい結果となった。それでは段越え見出しは、どのような事情で導入されるに至ったのか。次章ではこの疑問に対する回答をいくつか提示したい。

第三章 初登場以降の段越え見出し

第一節 硬派と軟派という記事の分類

本章では、段越え見出しが導入された事情について考察する。本節では見出しの話に入る前に、明治大正期において新聞記事がどのように分類されていたのかを、同時代のジャーナリストによる一般向け書籍から確認したい。まずは杉村楚人冠による、記事の分類の説明を引用する。

今日〔同書の発行は大正四年〕では余り使はぬ言葉であるが、今までよく『硬派』『軟派』といふ別を記事の上にも部属の上にも立てた。『軟派』といはるゝのが、一種の侮辱を感じるやうに思つて、『軟派』記者自ら社会部記者と名を改むるに至つた為に、自然『硬派』といふ名も段々に用ゐられなくなつたが、『硬派』とは、政治経済学芸宗教に関する記事をいひ、これらの記事の扱はる、政治部経済部外報部などの記者を『硬派』記者と称し、『軟派』とは、冠婚葬祭犯罪災異等の市井に関する記事及文芸演芸に関する事項を一括したものである⁽³⁴⁾

このように新聞記事は、主に政治経済面に当たる硬派と、主に社会面に当たる軟派に大別され、軟派は一段低く見られていた。

続いて、記事の種類と掲載面の関係について、後藤武男の説明を引く。

今日〔同書の発行は昭和元年〕の我邦の新聞紙の多数は、第一面を広告面とし、第二面を外国電報又は国内に於ける政治上のニ

ユースを入れ、第三面に社説その他の読物及び記事を配列し第四面を経済、金融に関するニュースを掲載し、第七面に於て社会生活に於て最も重大なニュース其他のニュースが最も感覺的に配列されて居て、第二、三、四面などは全く別世界の観をなしてゐる⁽³⁵⁾〔中略〕我邦では第一頁は広告面（大阪毎日及び大阪朝日は第一頁に重要記事を掲載すること欧米の諸新聞紙の如くである）⁽³⁶⁾に於て第二、第三の各頁を政治、外交、経済、文芸、社会の各部の割拠的編集を行つて居る、そこで第二頁の先づ頭の方には、自らその日の最も重大なニュースが配されて、読者の注意を惹くやうにしなければならぬ

硬派な記事は重要とみなされ、紙面の前の方に掲載された一方、軟派な記事は後ろの方に掲載されることが多かつたのである。

続いて、記事の種類と記事のデザインはどのように対応していたのか。小野秀雄は次のように説明する。

小野瀬不二人が〔恐らく大正二年ごろ〕東京毎夕に於て創始したる米国式の編集は各紙に流行して、政治経済面が英国風にジミなるに對し、社会面は三段抜見出し又は大活字を乱用し、日々写真版を掲載して全く別紙の感があつた⁽³⁸⁾

段越え見出しは大正初期の時点で、主に「軟派」な社会面で用いられていたことが分かる。

大正中期以降の社会面については、まず伊藤正徳の説明を引用しよう。

社会面は漸く「三面記事」の異名から脱出し、紳士淑女の見るべからざる所であつた此の紙面が、社会の上下を通じて一般に必ず眼を通す面となり、販売政策の上からも、社会部の紙面が最も重

要な役割を果たすことになった⁽³⁹⁾

このように大正中中期以降、社会面の地位は向上したという見方が存在する。一方、千葉亀雄は大正十四年の時点で、次のような認識を示している。

日本の新聞には、同じ日、同じ処に起つた事件が、強いて、政治面と社会面に向つて分割される。たとへば議会の代議士があげられたとなると、あばれるに至つた経路は、政治面で取り扱ひ、あげられた実況は、社会面で取り扱ひ〔中略〕なぜ、いつまでも、この社会、政治、経済の欄を必死に固守するか。それは思うにこう云うわけだ。つまり日本のこれまでの政治歴史が、政治、経済と云うものを、非常に高いものと思わせ、社会部記事を、くだらない民衆の一些事だと思わせるところにある⁽⁴⁰⁾

千葉の説明によれば、大正末期にも依然として社会面を下に見る風潮が続いていた。

以上より、遅くとも明治後期には硬派・軟派という概念が広く浸透していた。硬派の記事は前の方の面に、軟派の記事は後ろの方の面に掲載されていた。次節では、記事の硬軟と段越え見出しとの関係性について考察したい。

第二節 記事の硬軟と段越え見出しとの関連性

明治―昭和初期の知識人の間では、読売互版―錦絵新聞―小新聞といった系譜の大衆紙を、扇情的なイエロー・ジャーナリズムと結び付けて否定的に見る論調が存在した⁽⁴¹⁾。日本における本格的なイエロー・ジャーナリズムの先駆と評されるのが『東京毎夕新聞（毎夕）』である⁽⁴²⁾。『毎夕』は大正二年七月から、時には縦七段にも及ぶ派手な見出

しを取り入れるようになったという⁽⁴³⁾。もちろん、今回主に対象とした新聞では、ここまで派手な見出しは用いられていない。しかし二段上の見出しは全て、従来の一段見出しに比べて目立つという理由で、蔑まれていた可能性もあるのではないか。

さらに、前節で引いた小野の説明にあつたように、硬派な記事は『毎夕』の手法が他紙に波及した後も「ジミ」なデザインを維持していた。一方で軟派な面はそもそも重要性が低いとされていた。従つて軟派面の編集者は、読者により強い印象を与えようという意識の下、段越え見出しを積極的に用いるようになったのではないか。

ここで気になるのが、表1で見つたように、号外における段越え見出しの初期用例は戦争の記事ばかりだったという点である。戦争記事は政治や経済などと密接に関わっていることから、硬派と捉えることができる。従つて号外における段越え見出しの初出例は、軟派において段越え見出しが先行したという論の反証になり得る。しかし前節で引用した千葉の言葉からも分かるように、同じ事件が政治経済面と社会面で別々に取り上げられる場合があるなど、実際には硬軟の違いは曖昧だった。例えば表1でも紹介した、明治三十七年九月二日『東朝』号外「遼陽占領」は、勝利の女神のような挿絵と一体化した段越え見出しが用いられている。こうした華美なデザインには、戦勝をお祭りのように、つまり軟派な話題として捉える意識も表れているだろう。

新聞製作を支える技術の観点からも、段越え見出しについて考えてみたい⁽⁴⁴⁾。近代日本の新聞は基本的に、より多くの情報を載せるために、紙面の段数を増やして本文の活字を小さくする傾向にあつた。紙の大きさは変わらないとすると、必然的に、一段当たりの縦の長さは短くなっていく。並行して、見出しでは記事を目立たせるために、多少本

文の分量を削ってでも、大きな活字が使われるようになった。縦一段のスペースの中に、大きな活字の見出しを収めようと思うと、見出しの行数は長くなる。鈴木も、A B型の見出し（本文とは別行で、本文より大きな見出し）が主流になるに従って、日清戦争期に五行にも及ぶ一段見出しが登場したことを指摘し「段抜きの見出しが出現するのは、時間の問題」と述べている。⁴⁵

段越え見出しを用いると、段を越えていない見出しに比べて、同じ文字数・号数でも行数を減らせる。しかし実際には、見出しの行数を減らせることが段越え見出しの利点として認識されていたわけではないだろう。事実、段越え見出しが定着した後も、三行以上に及ぶ段越え見出しは決して珍しくなかった。⁴⁶むしろ見出しに文字数を多く費やせることが、段越え見出しの利点として認識されていたと思われる。見出しの文字数が増える恩恵を被ったのは、憶測の域を出ないものの、硬派よりも軟派だったのではないか。硬派な記事は見出しで事実を端的に伝える傾向があったのに対し、軟派な記事は扱うテーマの上でも読者の興味を引く上でも、見出しの文言を凝る必要性が高かったと考えられるためである。

続いて、記事の硬軟とは直接関係しない観点から、段越え見出しについて考察したい。再び技術面に着目すると、段越え見出しの挿入は、中段罫（段と段の間に引かれる横の罫線で、これと段越え見出しが重なることはない）の長さの変更を伴う。二段以上の挿絵や図表などの挿入と異なり、記事の位置にも気を配らなければいけないため、面倒な作業である。段越え見出しが初めて登場してから定着するまでに時間を要したのも、中段罫の長さを変更するノウハウの確立が難しかったからと考えられる。

今回扱った四紙では時折、通常より横長の紙を用いた縦一段の号外が発行されている。これも、段越え見出しを採用するかどうか判断する手間を省くためだったのかもしれない。とはいえ、号外は本紙に比べて少ない分量でも成立するため、本紙ほど段越え見出しの導入が面倒ではなかっただろう。前章第二節で触れたように、号外では段越えなのに本紙ではそうでない記事が存在したことも、号外の方が段越え見出しの導入が容易だったことの傍証となり得る。

さらに号外は速報のためのツールとはいえ、扱うテーマによっては事前に準備することも可能だった。例えば明治三十七年九月二日『東朝』号外「遼陽占領」で挿絵を組み込むことができたのは、速報が飛び込むより前に、遼陽占領を見込んで紙面の制作を進めていたからだろう。以上のような技術的要因も、本紙より号外で段越え見出しが先行した一因と考えられる。

最後に、東西『朝日』における段越え見出しの初出例がそうであったように、挿絵を伴う段越え見出しも存在したことを強調したい。見出しと一体化していない普通の挿絵は、段越え見出しの登場よりるか前から、頻繁に段を越えていた。例えば『東朝』なら明治二十一年七月十日の創刊号二面「涙」で、早くも縦二段以上三段以下の挿絵が見られる。

前章第二節で指摘したように、挿絵と見出しが一体化した「ロゴ」は、連載の途中であっても頻繁に変更されていた。段越え見出しは「ロゴ」を試行錯誤する中で偶然生じたものであり、初めから「段を越える」記事の重要性を強調するといった意図で用いられたわけではないだろう。むしろ、元々段を越えやすい性質を持っていた挿絵に便乗する形で、見出しも同時に段を越えたのだといえる。

以上、本章では、硬派と軟派という記事の分類を確認した後に、段越え見出しがどのような事情で導入されたのかについて考察した。現時点で考えられる可能性を再度列挙すると、次のようになる。

- ① 段越え見出しは、元々派手とみなされていたものであり、硬派では忌避された。一方、軽視されていた軟派では記事を目立たせる手段として重宝された。
 - ② 見出しの段数が増えるほど、見出しに費やせる文字数も増える。軟派では記事の性質上、見出しの文言を凝る場合が多く、段越え見出しに親和的だった。
 - ③ 段越え見出しの挿入は面倒な作業であったため、導入から定着まで時間を要した。号外で段越え見出しが先行したのは、本紙ほど挿入の手間がかからなかったためと考えられる。
 - ④ 見出しは、元々段を越える場合も多かった挿絵と共に「ロゴ」のような形で、初めて段越えを果たす場合もあった。「ロゴ」が段を越えるという現象は、記事を強調するためというより、試行錯誤の過程で偶然生じたといえる。
- 以上の四点を一言でまとめると、段越え見出しは、送り手側のやむを得ない事情や偶然によって導入されたといえるだろう。少なくとも、重要な記事だから見出しが段を越えた、といった先行研究の主張を鵜呑みにできなくなったことは確かである。

第四章 新聞デザイン史研究の応用可能性

第一節 新聞の記事数から見る一九一八インフルエンザ

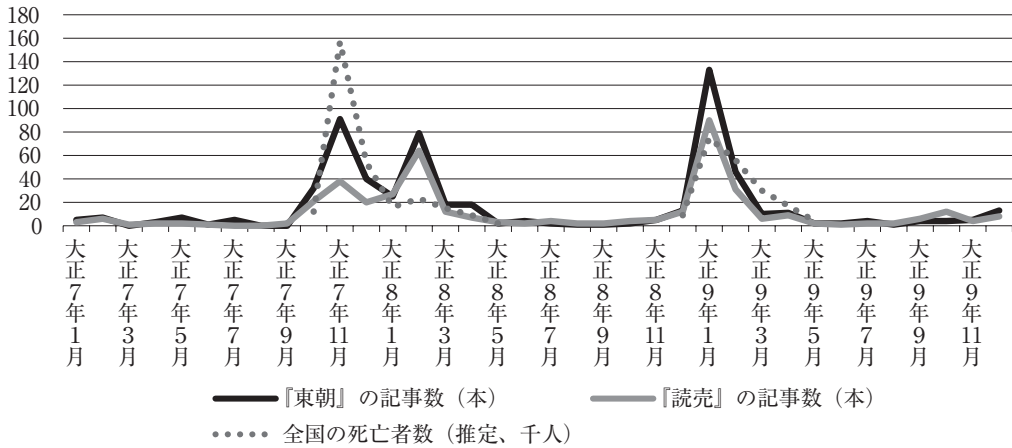
前章までは段越え見出しを例に、新聞デザイン史研究そのものが秘める可能性を提示してきた。続いて新聞デザイン史研究を、他の歴史研究に応用できる可能性を示したい。⁽⁴⁷⁾ 本章では例として、一九一八インフルエンザを扱う。

一九一八インフルエンザを主題とする包括的な歴史研究は、日本では速水融『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ——人類とウイルスの第一次世界戦争』⁽⁴⁸⁾がほとんど唯一である。⁽⁴⁹⁾ このような研究の少なさと犠牲者数の多さのギャップから、一九一八インフルエンザは「忘れられたパンデミック」⁽⁵⁰⁾などと評されてきた。しかし、一九一八インフルエンザは本当に「忘れられた」のだろうか。そもそも流行当時からさほど重視されていなかった可能性も考えられるのではないか。

本章では、大正七―九年に出された新聞記事のうち、一九一八インフルエンザに関するものを分析する。対象紙は、当時一流紙とされていた『東朝』と、二流紙とされていた『読売』⁽⁵²⁾である。

最初に『東朝』と『読売』それぞれのデータベースで、一九一八インフルエンザ関連記事を検索し、月別に記事数を算出した。さらに、一九一八インフルエンザで死亡したと推定される人数も、月別に算出した。両者のグラフを重ね合わせた結果、流行の三つのピークの時期と、記事数の三つのピークの時期が一致していることが分かる(図3)。⁽⁵³⁾ 『東朝』と『読売』は、一九一八インフルエンザ関連記事を多数、

【図3】1918インフルエンザ関連記事数と、1918インフルエンザによる死者数の推移



全国の死者数は、平常年の死者数を参考にした「超過死亡」という概念を用いて算出した。具体的な算出方法は、以下の通りである（特記なき限りは速水前掲書、236-239頁に基づく）。まずは1918インフルエンザが流行していない大正5年10月～大正6年5月、大正6年10月～大正7年5月、大正9年10月～大正10年5月の各月について、統計局編『日本帝国死因統計』を基に死者数を把握する。次に各年の10月から翌年5月までについて、同じ月の死者数を合算して3で割った値を平常年の死亡水準とみなす。最後に大正7年10月～大正8年5月の死者数と、大正8年12月～大正9年5月の死者数について、それぞれ平常年の死亡水準との差を取る。なお死者数を算出する上で、速水は死因を呼吸器系疾患や「不明」のみに絞っている。しかし高山幸男「日本における超過死亡によるスペインかぜ再考」（『日本臨床内科医会誌』23巻5号、2009年、594-600頁）では、心不全などもインフルエンザから引き起こされ得るとして、全ての死因を対象とした死者数を速水と同様の方法で算出している。本稿でも高山に倣い、全ての死因を対象に死者数を算出した。

流行のピーク時に公開していたといえる。

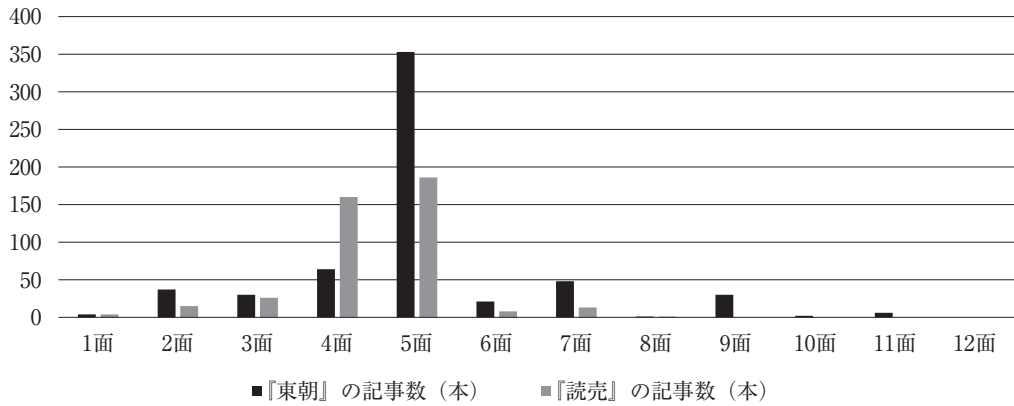
以上より、新聞では一九一八インフルエンザが重点的に報道されていなかった可能性が浮かび上がる。しかし、記事の数が少ないとしても、仮に個々の記事の扱いが大きければ、一九一八インフルエンザは重視されていた可能性も残る。そこで、次に一九一八インフルエンザ関連記事のデザインについて考察を試みたい。⁵⁴⁾

第二節 新聞のデザインから見る一九一八インフルエンザ

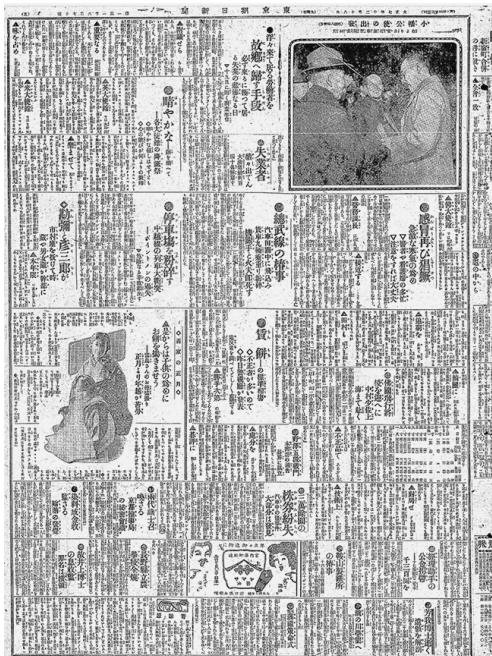
どの面にとどの記事を書けるのかという点も、新聞デザインの一部である。一九一八インフルエンザ関連記事が主に何面に掲載されたのかを調査すると、海外での流行を伝える記事は主に二、三面に掲載されていたものの、最も数が多い国内での流行を伝える記事は主に四、五面に掲載されている（図4）。この四、五面こそが、前章で「軟派」として軽視されていた、社会面なのである。正確には『読売』の四面は婦人面に相当するものの、扱いは社会面よりもさらに低かったとされる。⁵⁵⁾

一九一八インフルエンザ関連記事のレイアウトについても考察したい。流行初期に当たる大正七年十二月十八日『東朝』五面「●感冒再び猖獗」（図5）は二段見出しであり、この頃の『東朝』としては最も段数が多いと思われる。しかし、同じ段には他にも二段見出しが三つ存在しており、さらに「●感冒再び猖獗」より上に一段見出しの記事も存在している。現代の新聞であれば、ある記事よりも見出しの段数の少ない記事が上に来ることは避けられる上、同じ段数の見出しが並列に配置されることも少ない。従って、この記事が掲載された紙面では、現代の新聞ほど厳密に記事の重要度が定量化されているとは言

【図4】1918インフルエンザ関連記事の掲載面



【図5】大正7年12月18日『東朝』5面



【図6】大正9年1月11日『東朝』5面



い難い。二段見出しが用いられていることだけを以て、この記事が重視されていたとは断定できないのである。もちろん全く重視されていなかったわけでもないだろうが、少なくともこの記事に関しては、前章の第二節で考察したように、見出しの文字数を確保するために二段見出しという形式を採ったという側面も大きいだろう。

流行末期に当たる大正九年一月十一日『東朝』五面のトップに当たる「この恐しき死亡率を見よ 流感の恐怖時代襲来す」は縦三段と、当時としては最大級と思われる見出しが採用されている。本文中では感嘆符を用いるなどして、流行拡大への危機感をあらわにしている。感染対策のためにマスクを付ける人を写した「口覆をつけて」という目を引く写真も掲載されている。これは比較的大きな扱いの記事だといえよう。しかし、これと同等かそれ以上に扱いが大きい一九一八インフルエンザ関連記事は『東朝』にも『読売』にも存在しない。さらに、この記事のような「段越え見出し+写真」というレイアウトは、あくまで当時の『東朝』の五面としては一般的なものであった。テキストだけでなくデザイン面からも、この記事は一九一八インフルエンザが恐れられていたことの証拠としては弱いといえよう。

そもそも前節で見た図3も見方によっては、一九一八インフルエンザの流行が落ち着いていた時期に、流行再拡大への警戒を呼び掛けるような記事がほとんど存在しなかったことを示している。『東朝』と『読売』は、一九一八インフルエンザについて、熱心というよりはむしろ場当たりに報道していたといえるだろう。

なお、本来は一九一八インフルエンザ関連記事の内容についても触れるべきだが、紙幅の都合で詳しく扱えなかった。全体的には、流行状況を正確にとらえている記事とそうでない記事があり、一九一八イ

ンフルエンザに対する一貫した報道姿勢はうかがえなかった。

以上、本章では一九一八インフルエンザを例に、新聞デザイン史研究の応用可能性を提示した。新聞報道をオーソドックスに記事数（や記事本文）から分析するだけでは、一九一八インフルエンザがどれだけ重視されていたのか判然としない。しかし新聞報道をデザインという観点から分析すると、一九一八インフルエンザはそれほど重視されていなかったという説を補強することができた。

おわりに——今後の課題

本稿は、新聞デザイン史研究を進める上での出発点として、段越え見出しに着目した。第一章で見出しの略史や先行研究を押さえた後、第二章では『東朝』『大朝』『東日』『大毎』の四紙を対象として、段越え見出しの初出時期の特定を試みた。結果、通説で指摘されていたよりも早い時期に、段越え見出しが登場していたことを実証することができた。第三章では、初期の段越え見出しは送り手に記事の重要性を示すためというより、字数の調整や技術的制約といった送り手側の事情に左右される形で導入された可能性を示した。第四章では新聞デザイン史研究の応用可能性を示すために、一九一八インフルエンザが流行当時の程度新聞報道で重視されていたのかという点を検証した。結果、デザインの観点を加味することで「重視されていなかった」という結論が導かれた。

本稿はあくまで新聞デザイン史研究の一步目を踏み出すことが目的であった。眼前には今後乗り越えていかなければならない課題が山積している。将来的には、記事本文や写真、図表といった、新聞を構成

する見出し以外の要素も総合的に検討しなければならぬだろう。本稿で取り上げていない新聞の分析や、日本以外の新聞・国内外の雑誌といった他メディアからの影響も、研究を深める上では欠かせない論点である。本稿ではあくまでモノとしての新聞の分析に終始したが、今後は新聞に携わった記者・読者個人の史料も読み解いていく必要があるだろう。他にも課題を挙げるとキリがないが、まずは本稿で示した段階越え見出しの登場・定着過程を、さらに細かく見ていきたい。

註

- (1) 共同通信社編著『記者ハンドブック 新聞用字用語集 第十三版』(共同通信社、二〇一六年) 八頁。
- (2) 熊田亘『新聞の読み方上達法』(ほるぷ出版、一九九四年) 三二頁。
- (3) スペイン風邪という名前の由来は、当時第一次世界大戦の中立国だったスペインが情報統制をしておらず、流行状況がいち早く世界に伝わったためとされる(A. W. クロスビー著、西村秀一訳『史上最悪のインフルエンザ——忘れられたパンデミック』(みすず書房、二〇〇四年、原著の初版は一九八九年) 四五頁)。近年は流行年にちなんだthe 1918 fluという表記も増えており、本稿もこれに倣った。
- (4) ただし『東日』が『大毎』と合併したのは明治四十四年である(毎日新聞社編『毎日』の3世紀——新聞が見つめた激流130年 上巻)(毎日新聞社、二〇〇二年) 三七八頁)。
- (5) 東西『朝日』の閲覧に際しては、朝日新聞記事データベース「聞蔵Ⅱビジュアル・ライブラリー」を使用した。東西『毎日』

の閲覧に際しては、毎日新聞記事データベース「毎索」を使用した。

- (6) 山本武利『近代日本の新聞読者層』(法政大学出版局、一九八一年) 一一七頁など。
- (7) 『読売』の閲覧に際しては、読売新聞記事データベース「ヨミダス歴史館」を使用した。
- (8) 本稿で主に扱う新聞は、明治期には夕刊を原則として発行していなかった。例外として『東朝』は明治三十年一月から、朝刊を第一回と第二回(事実上の夕刊)に分けて発行することを試みている。しかし配達員の負担が重いなどの理由で、明治三十年八月からは再び一日一回朝刊のみ発行の形態に戻った(朝日新聞百年史編修委員会編『朝日新聞社史 明治編』(朝日新聞社、一九九五年) 三六四頁)。
- (9) 松村明教授還暦委員会編『国語学と国語史——松村明教授還暦記念』(明治書院、一九七七年) 七五九―七八一頁。
- (10) 本稿では見出しなどの史料を引用する際、傍点の有無や文字の大きさなどの形式(デザイン)までは再現せず、あくまでその内容(テキスト)のみを示す(以下同様)。また史料の引用に際しては、適宜旧字を新字に改め、仮名遣いはそのままとした(以下同様)。
- (11) 鈴木前掲論文、七八〇頁。
- (12) 『社会志林』五十五巻一号、二〇〇八年、一一一七頁。
- (13) 同上、十二頁。
- (14) 『人間科学』七十一号、二〇〇九年、三九―六二頁。
- (15) 『デザイン学研究』五十巻一号、二〇〇三年、五五―六四頁。

- (16) 至文堂、一九六一年。
- (17) 進藤咲子「II文章篇 第四章 新聞の文章」二五七頁（進藤『明治時代語の研究——語彙と文章』（明治書院、一九八一年）所収）。ただし同論文の初出は、時枝誠記、遠藤嘉基監修、森岡健二、永野賢、宮地裕、市川孝編集『講座 現代語 2 現代語の成立（明治書院、一九六四年）一九一—二一八頁で、鈴木前掲論文より早い。
- (18) 引用文中の「」で囲まれた箇所は、本稿の著者による補足である（以下同様）。
- (19) 西田前掲書、二三三—二三四頁。
- (20) 土屋礼子『大衆紙の源流——明治期小新聞の研究』（世界思想社、二〇〇二年）一〇五頁。
- (21) 同上、一〇五頁。なお奥は土屋の議論について「近代日本の新聞ジャーナリズムは、視覚メディアという意味では、錦絵新聞といったんはつきり断絶していたこともまた間違いないだろう」と補足している（奥前掲論文、三頁）。
- (22) 土屋前掲書『大衆紙の源流』一〇三頁。
- (23) 同上、三六頁。
- (24) 山本武利『新聞記者の誕生』（新曜社、一九九〇年）の「主要新聞系統図」（頁数は振られていないが七頁に相当）の分類に依拠した。
- (25) 奥前掲論文八頁によれば、日本初の日刊紙『横浜毎日新聞』（大新聞）の場合、明治四年一月二十八日の創刊号では全ての記事にタイトルがなかった（奥は、鈴木の間ところのA B型の見出し以外は、見出しではなく単なるタイトルとみなしている）。
- 以降、散発的に記事にタイトルが付くようになり、明治十七年十二月十七日（『東京横浜毎日新聞』に改題）から一斉に全ての記事にタイトル（かぶせ見出し）が付いたという。
- (26) 鈴木前掲論文、七六〇頁。
- (27) 同上、七六二—七六三頁。
- (28) 本稿では新聞の原紙で直接活字の大きさを測ることはできなかった。以下で出てくる号数は、記事本文を五号と仮定して推定したものである。
- (29) 奥前掲論文、十一頁。
- (30) 大空社、一九九七年。同書は羽島が自ら重要だと考える号外を厳選して収録したもの。
- (31) ただし遅くとも明治二十年ごろまでは、さほど重要でないニュースも号外として報じられることがあった（羽島知之『号外』明治史 1868—1912 Vol. I 十頁）。
- (32) カナダの日系移民については、河原典史「20世紀初頭のカナダ西岸における捕鯨業と日本人移民」（『地域漁業研究』五二巻二号、六五—八三頁、二〇一二年）などを参考にした。
- (33) 日露戦争とは無関係の記事も含めば、明治三十八年一月一日『大毎』二面「懸賞募集 二十世紀の日本商人」などで段越え見出しが用いられている。もともとこれは記事（ニュース）というより、社告とみなした方が良くかもしれない。
- (34) 杉村楚人冠『最近新聞紙学』（慶應義塾出版局、一九一五年）紙面整理編四頁。
- (35) 後藤武男『新聞紙講話』（同文館、一九二六年）三七—三七二頁。

(36) 同上、三八四頁。

(37) 土屋礼子「大正期の夕刊紙『東京毎夕新聞』にみる新聞の大衆化」吉見俊哉・土屋礼子責任編集『叢書 現代のメディアとジャーナリズム4 大衆文化とメディア』（ミネルヴァ書房、二〇一〇年）四三頁。

(38) 小野秀雄『日本新聞発達史』（大阪毎日新聞社・東京日日新聞社、一九二二年）一四三頁。

(39) 伊藤正徳『新聞五十年史』（鱗書房、一九四七年）一四三頁。

(40) 千葉亀雄『新聞講座』（金星堂、一九二五年）二六三―二六六頁。

(41) 土屋礼子「戦前期新聞研究における読売瓦版・錦絵新聞・小新聞——新聞の大衆性をめぐって」（『人文研究』五十巻第九分冊、一九九八年）四四―五一頁。

(42) 同上、四五頁。

(43) 土屋前掲論文「大正期の夕刊紙『東京毎夕新聞』にみる新聞の大衆化」四三頁。

(44) 近代日本の新聞制作を支えた技術に関する研究も、発展の余地が大きいと思われる。この点について問題提起した論文として、有山輝雄「技術から見たメディア史——量的拡大と省力化の技術」（『メディア史研究』三十七号、二〇一五年、三〇―四八頁）が挙げられる。

(45) 鈴木前掲論文、七七〇頁。具体的に鈴木が例示しているのは、明治二十八年八月三十一日『東朝』一面「台湾の奪取 彰化の占領 南下軍の困苦と戡定の偉功」である。

(46) 読売新聞社編『新聞雑誌編輯者・記者の基礎知識』（読売新聞

社、一九三二年）五〇―五一頁では、二行より三行の見出しの方が優れているという旨の説明が記されている。

(47) 本章の骨子は、著者が二〇二〇年度に東京大学文学部に提出した卒業論文「スペイン風邪をめぐる認識——当時の新聞報道を中心に」に基づく。

(48) 藤原書店、二〇〇六年。

(49) 流行直後に編まれた貴重な調査書としては、内務省衛生局編『東洋文庫七七八 流行性感冒「スペイン風邪」大流行の記録』（平凡社、二〇〇八年。原著の初版は一九二二年）が存在する。特定の地域・集団におけるスペイン風邪の流行に着目した文献としては、小田部雄次『百年前のパンデミックと皇室 梨本宮伊都子妃の見たスペイン風邪』（敬文舎、二〇二〇年）などが挙げられる。武田勝「マスメディアのなかの疾病観——スペインかぜをめぐる言説を手がかりに」（流通経済大学博士論文、二〇〇〇年）のように、他の研究テーマに関連する要素として一九一八年フルエンザを扱った文献も複数存在する。

(50) 速水の推計によれば、一九一八インフルエンザによる死亡者数は、日本の内地だけで約四十五万人に及ぶという（速水前掲書、二五〇―二五三頁）。

(51) クロスビー前掲書の副題がまさに「忘れられたパンデミック」である。

(52) 小野前掲書、四六七―四六八頁。

(53) 『東朝』と『読売』両方で、検索キーワードは「スペイン風邪」「インフルエンザ」「流行性感冒（インフルエンザの別称）」「感冒（流行性感冒の略称）」「風邪（当時一九一八インフルエン

ザはこう略述されることも多かった)の五語とした。「悪性感冒」「スペインかせ」「流感(流行性感冒の略称)」などの語を含めても検索結果は変わらなかった。あくまで大まかな記事数の推移を把握することが目的であり、実際には検索結果に含まれない一九一八インフルエンザ関連記事や、検索結果に含まれてはいるものの実際には一九一八インフルエンザとは無関係な記事もある。なお、検索結果には広告も多少含まれる。

(54) 正確には、一九一八インフルエンザ関連記事をどの日に何本出すかを考えることも、本稿で言うところの広義の「デザイン」に相当する。しかし現実には、現場の記者や編集者は飛び込んでくるニュースを次から次へと処理することで精一杯であり、テーマ別に記事の本数をあらかじめ決めておく余裕は(連載や特集記事を除いて)なかっただろう。

(55) 安成二郎「新聞と婦人」(橋篤郎編『総合チャーターナリズム講座9』(内外社、一九三二年)五〇頁)。

〔付記〕本稿は、東京大学大学院人文社会科学系研究科の二〇二一年度演習「明治期社会経済史演習」での報告をもととする。ご意見をいただいた参加者各位にお礼申し上げます。